

卒業待たず働く

博士課程の総まとめとしてフロリダ州のウォルト・デイズニー・ワールドで3日間の貴重な学習経験を積み、ちよつとその時公開されたスター・ウォーズ、エピソードVI「ジェダイの帰還」を鑑賞してから、私は6月に行われる卒業式を待



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 27

たずにドイツ経由で日本へ戻った。長い学生生活を終えてやっと仕事に就くことができるという充実感もあったが、すぐにも自己矛盾に陥ってしまふ気がした。何故かという、指導教員らの前「Not everything that can be learned can also be taught」と宣言した私は、1983年の秋学期から非常勤として(宗教科の教員免許取得のために

思いもよらず研究課題発見

必須の) 宗教科教育法を担当することになったからである。



ロゴスセンターの部屋で
について考察を重ねてきた一人の教員として感じるこ
の自己矛盾を、継
続的な研究課題と
することにした。
というのも、私は、
1984年4月から
始まった新しい
局面、つまり専任
教員となった私に
与えられた役割に
直面していたから

るようになった。言葉としてのタイムテーブルにまとま
てだけ知っていた「学科会
議」「教授会」「○○委員
会」は、直接に経験する現
実となった。もちろん、学
長や理事長などは、他の人
がやっていることで、自分
にはあまり関係のない仕事
に見えたが。
はつきりとは覚えていな
いが、(当時の)文学部教
育学科の専任講師として任
命された最初の委員会は、
時間割編成委員会であつた
と思う。自分の授業のため
都合の良い時間帯を確保し
よつと競っている先生方の
要望を調整する作業であつ
たが、これが何となく一つ
か、と。
あの良き古き時代を振り
返っていつも思う。パソコ
ンも冷房もない研究室で、
何故仕事ができていたの
か、と。

画人としてのキャリアのス

た」として

即ち愛知県出身の井戸田潤